

若山牧水「幾山河」の歌をめぐって

石井 茂

幾山河越え去り行かば寂しさの果てなむ国ぞ今日も旅ゆく

牧水の歌は、おおらかで流暢な旋律、寂しくもの悲しい余韻、酒・恋・旅などによる取材、平明自在な日常語の駆使、日本人的郷愁をかきたてるような作風、などがその特徴としてあげられる。それは、自然を深く愛し、人情の機微に繊細で、哀韻余情を好む日本人の嗜好にかなない、そうした民族性の所産である伝統詩歌をよく継承して、日本人のだからも広く深く愛され親しまれている。

わけても「幾山河」の歌は、牧水を象徴し代表する歌として知られている。戦犯に指名され、昭和二十年服毒自決した近衛文麿も、平素愛誦して止まなかったと聞いている。この歌については、大悟法利雄氏をはじめ森脇一夫氏ら多くの専門研究家の、数々の精細な研究⁽¹⁾がある。私は牧水研究としては全くの素人ではあるが、牧水愛好という点では並み以上と自負している一人である。その立場からこの歌について今まで読んだり調べたり感じたり考えたりしているところをまとめてみようと思う。

一 牧水の旅と歌

思ひ立たばげに足もとの鳥よりもあわただしきは君が旅立ち

若山牧水「幾山河」の歌をめぐって

汝が夫は家にはおこな旅にあらば命光ると人のいへども
右の二首は妻の喜志子の歌である。牧水の旅立ちはきわめて発作衝動的であることは余りにも有名であり、その歌がかれの人生や芸術と深くかかわる点なども諸研究が明らかにするとところである。そして、旅の対象は主として海・山・溪谷などに向けられ、本州各地は勿論、北は北海道、南は九州、さらには朝鮮半島にまで及び、その足跡を記念する歌碑の数は凡そ七十に達している。その四三年間の生涯の半ば近くは旅に送ったというも過言ではあるまい。七周忌に師の尾上柴舟が、次のように詠んでいる。

そのかみの西行芭蕉良寛の列にだれおくれ君をおく

また、牧水は昭和三年九月十七日に没し十九日の告別式に、日本歌人を代表して北原白秋が弔辞を読むが、その中で「……君は恬淡にして真率辺幅を飾らず、つねに飄々として歌に執し旅に思ひ、また、ひたすら酒を楽しんでゐられた。自然を愛し、その寂寥を寂寥とする心は君の本質であられた」と述べているが、早大同期の友、「早稲田三水」⁽²⁾として、牧水と最も親しい関係にあつた者の、牧水の本質を衝いた言葉である。

また、牧水自身も、「創作」のアンケート⁽³⁾で「好きなもの」に答えて、「旅、歌、酒、独居、団欒、温泉、樹木、野菜……」と書き、

「愛読書」として、「万葉集、独歩集、露西亜の小説」と答えている。まさに牧水の人生をそのままに示す事項の数々である。それを包括するものは「旅」である。そして、旅好きはそのまま自然好きでもある。牧水の号は延岡中学五年ごろから使用しているが、その「牧」は敬愛する母の名マキにとり、「水」は故郷宮崎県臼杵郡東郷町字坪谷の耳川やその支流坪谷川の水からとったという。故郷の自然を評して、私の生まれた村は……山と山との間に挟まれた細長い峡谷である。殊に南には附近第一の高山である尾鈴山おすずがけわしい断崖面を露はして眼上に聳えてゐるので一層峡谷らしい感じを与へてゐる。……その山の北面には、晴れた日でもよく雲を宿してゐるが、一朝雨が降ると、山全体が、いやその峡谷全体が真白な雲で閉ざされてしまふ。そしてその雲の徂徠によって至る所の巒の多いその嶮山が恰も靈魂を帯びたかの様に躍動して見えるのである。「思ひ出の記」と述べる。この神秘的靈魂をさえ感じさせるような幽邃深遠な山や川との間断なき接触が、それが物心つく幼時からのものであっただけに、その人間形成に深い感化影響を及ぼしたものといえよう。

幼き日ふるさとの山にむつみたる細溪川の忘れぬかも

「さびしき樹木」(4)

次に、旅についての見方を端的に示すものは数々あるが、代表的なものとして、歌集「独り歌へる」の序文を引用しよう。

私はつねに思つてゐる。人生は旅である。われらは忽然として無窮より生れ、忽然として無窮の奥に行つてしまふ。その間の一步一步の歩みは、実にその時のみの一步一步で、一度往いて再びかへらない。私は私の歌をもつて、私の旅のその一步一步の響であると思ひなしてゐる。いひかへれば、私の歌はその時々私の生命の破片

である。……

そこには旅は即ち人生であり芸術であるとする西行や芭蕉の態度が見られると共に、独歩の「大自然と相面して自己の隻影を顧みるとき、今更の如くわが生の孤独と不安とに堪へず云々」(5)と云う、天地自然の悠久に対比してとらえた無常有限なる人間の生への凝視が、牧水にも見られる。従つて、かれの旅は人の世に飽き疲れたことの気散じや慰藉の旅ではなく、「ほんとうに静かな旅、心を遊ばせ解き放つ旅われとわが足音に聴き入る様な旅をするならば、ひとり旅に限るやうである。そして行く先々でも人に逢はぬ」(6)そんな旅を理想とし、心がけて旅をしていたのである。その点はかれの飲酒ぶりとも通ずるものがあつた。長女みさき氏の書いた父の酒について、「忘れられないものに父の晩酌の折のひとみの色が有り、それはやりやうのない暗い重いさびしそうな」目つきであり、また、「子供の目にうつつた父の酒は綺麗であり、父の一座する酒の席は美しく、私達は家族の中で、悪口や愚痴や卑猥な言葉を、一度も聞くことなく育つた」(7)と語る。

白玉しらたまの齒にしみとほる秋の夜の酒は静かに飲むべかりける

「路上」

の歌どおりの飲み方が多かつたようである。孤独に徹し、寂寥をかみしめるための酒であつたのである。そんな旅であつたからこそ、カール・ブッセの「山のあなた」の詩(8)や、ボードレルの「旅」(9)と題する詩が常時口ずさみ愛誦されたのであろう。その旅に関する歌は、全歌作約七千首のうち三分の一を占めるといわれる。なお、旅を散文で表現した紀行文にも「みなかみ紀行」などすぐれたものがある。次に代表的と思われる旅の歌数首をあげよう。

山眠る山のふもとに海眠るかなしき春の国を旅ゆく「海の声」
いざ行かむ行きてまだ見ぬ山を見むこの寂しさに君は耐ふるや
「独りうたへる」
とふなかれ今はみづからえも分かずひとすぢにただ山の恋しき

朝の山日を負ひたれば溪音の冴へこもりつつ霧立ちわたる
「死か芸術か」

行き行くと冬の日の原に立ちどまり耳をすませば日の光きこゆ
「溪谷集」
「くろ土」

いはけなく涙ぞくだるあめつちのかかるながめにめぐりあひつゝ
「山桜の歌」

二 「幾山河」の歌の旅

この「幾山河」の歌は、次のように三回にわたって発表になった。
第一回は明治四十年八月の「新声」に「旅人」と題する一五首のうち
の一首として、第二回は同四一年七月の第一歌集「海の声」に「十首
中国を巡りて」のうちの一首として、第三回は同四三年四月の第三歌
集「別離」に「九首中国を巡りて」のうちの一首としてである。
それぞれどのように異同しているか概説しよう。

「新声」の場合（歌の上の番号は便宜上附したもの）

- ① けふもまた心の鉦をうち鳴らしうち鳴らしつつあくがれてゆく
- ② 海見ても雲あふぎても吾が思ひはかへる同じ樹陰に
- ③ ただ恋しうらみ怒りは影もなし暮れて旅籠の欄に倚るとき
- ④ 幾山河越え去り行かば寂しさの果てむ国ぞ今日も旅行く
- ⑤ うつろなる胸にうつりていたづらにまた消えゆきし山河のかず

若山牧水「幾山河」の歌をめぐって

- ⑥ 松の実と楓のはなと仁和寺の夏なほわかし山ほととぎす
- ⑦ わが胸の奥にか香のかをるらむこころ静けし古城を見る
- ⑧ 青海はにほひぬ宮の古ばしら丹なるが淡う影うつすとき

（敵島にて）

- ⑨ 寂寥や月無き夜をみちきたりまたひきてゆく大海の潮

（日本海を見て）

- ⑩ 峽縫ひて車は走る梅雨の日の雲さはなれや吉備の山々
- ⑪ 山静けし山の中なる古寺の古りし塔見て胸ほのに鳴る
- ⑫ 桃柑子芭蕉の実売る磯町の露店の油煙青海にゆく
- ⑬ 旅ゆけばひとみ瘦るかゆきずりの女みながらよからぬは無し
- ⑭ 安芸の国こえて長門にまた越えて豊の国行き杜鵑聴く
- ⑮ 酒飲めど飲めども酔はず思ふことあるとしもなう灯と向ふ夜よ

「海の声」の場合

- ⑥ 「松の実と」の歌を先頭に出し、次に「十首中国を巡りて」と題
詞して①②④⑦⑩⑧⑪⑫⑬の歌の順序に並び、③は「宮島にて」、
⑭は「山口の瑠璃光寺にて」、⑮は「下関にて」、⑨は「日本海にて」
と注がついている。また⑭③の歌は「二首耶馬溪にて」と別立てにし、
⑤⑮の歌は省かれている。旅の道順に並べかえたのである。

「別離」の場合

- 「九首中国を巡りて」として、前集の十首のうちの⑦の歌を省く。本
文の改変も目立ち、⑨の歌の「寂寥や」が「あをあをと」に、⑩の歌
の「車は」が「吾が汽車」に変わり、⑪の歌は大きく変わり、「はつ
夏の山のなかなる古寺の古塔のもとに立てる旅人」となる。なお、
「幾山河」には「いくやまかは」とルビがつく。

これら一連の歌とその順序によってこの旅の大体が推量されよう。

明治四十年の六月下旬から七月にかけて、早大英文科二年の牧水は、試験を終え、直井敬三という延岡中学の同期生で国学院に学び、牛込榎町の小倉方に同宿する友人と、帰郷の途につき、直井は船路をとって神戸で別れ、ひとり陸路をとって中国路に入り、六月二十九日の夜は岡山駅前の「はつね」という旅館に泊まり⁽¹²⁾、総社附近の湛井迄は湛井線（伯備線の前身）を利用した。⑩の歌「峽縫ひて」はその車中詠であろう。総社に一泊し高梁までの約三〇キロは徒歩の旅であつただろう。⑦の歌の「古城」は高梁の町はずれの臥牛山頂の古城と思われる。新見迄は高梁川沿いに上り勾配の道で約四〇キロ、勿論徒歩であつただろう。新見で一泊、そこは関氏一万八千石の陣屋のあつた静かな田舎町で、田山花袋は「蒲団」で女主人公横山芳子の郷里として、

（時雄ハモデルは花袋Vは、芳子ハモデルは岡田美知代Vと田中ハモデルは永代静雄Vとの恋をもてあまして、芳子の父親ハモデルは岡田胖十郎Vに上京を促す手紙を書いて）封筒に収めて備中国新見町横山兵蔵様と書いてそばに置いてじつとそれを見入った。この一通が運命の手だと思つた。思い切つて婢を呼んで渡した。一日二日、時雄はその手紙の備中に運ばれていくさまを想像した。四面山で囲まれた小さな田舎町、その中央にある大きな白壁造り、そこに郵便脚夫が配達すると、店にゐた男がそれを奥へ持つていく。丈の高い髻のある主人がそれを読む——運命の力は一刻ごとに迫つてきた。

と記している。この町は実は新見ではなく、ここからさほど遠くない、同じ中国山中の田舎町である、広島県甲奴郡上下町であり、町の描写も、白壁造りの家（現存して藤永氏の所有となり、農具雑貨商を営み、かなり変形されているが、堂々として華麗であつた往時の面影を多分に残している）の様子も、長髯を蓄えた主岡田胖十郎の風貌も作中描写によく

似ている。花袋は明治三十九年この上下町に旅して二泊している。

新見から芸備線（昭和五年開通）に沿った街道を東に約二五キロほど行くと、広島県との県境に近い阿哲郡哲西町のはずれに二本松峠がある。標高は四一三メートルに過ぎないが、幾山河を経て到達する地点であり、また前途にも東城川・帝釈川などの峡谷があり、中国山地が起伏重畳として続いている。巨大な自然石に丸味のある奔放な字体で刻まれた「幾山河……」の歌碑（昭和三十九年十一月建立）があり、そばには妻喜志子・長男旅人氏の歌碑も寄り添うように建っている。そこは熊谷屋⁽¹³⁾という茶店（宿屋をも兼ねた）の跡という。「幾山河」の歌はここで詠まれた⁽¹⁴⁾といわれる。そしてその日は明治四十年七月二日と大悟法氏は推定している。

その翌日以後、どのコースをとったかは不明であるが、⑧の「青海は」の歌が宮島での詠であるところから、広島に出たことは確かだ、さらに山口に入り、山口市の瑠璃光寺に立ち寄つて⑩の歌を詠み、⑫の歌から下関へ、そして海峡を渡つて九州の耶馬溪に遊んで⑭⑮の各歌を詠んだのである。さて二本松から広島間のコースであるが、東城町に入り、そこからは森脇氏が、「東城―神石―上下―甲山を経て尾道か河内あたりに出て汽車に乗つたのではないか、と思われるが、東城―庄原―三次―広島の間も考えられないでもない」⁽¹⁵⁾と書いているが、私も上下町と岡田美知代との関係から前者のコースをたどつたものと推定している。後者は今の中国自動車道の大体のコースに当たり、時間的・地理的に無理も少ないが、やはり前者と考へたい。前者の東城―神石間には深山幽谷の景勝帝釈峽があり、上下―甲山―尾道間は、古くから出雲大社への山陽道からの主要な参拝道であり、江戸時代には石見銀山（別名大森銀山）⁽¹⁶⁾産出の鉱物の江戸への運搬道路

(上下町は天領として幕府直轄下に置かれ、大森代官出張所があった)として古くから開かれていた街道であったのである。

三 「幾山河」の旅の動機

この中国山地に迂回した行程の、徒歩の部分の大体の距離は百数十キロに及ぶ。しかも牧水にとっては初めての長旅である。そこには何かの意図や目的があつたのであろう。その動機について考えてみよう。明治四十年六月十七日試験終了に際し、宮崎の都農町の義兄宛に次のようなハガキを出している。「病氣¹⁸にてただ一人にて帰国すること心細く候へば、友人を待ち合はせて、この二十三、四日のころ、当地出発のつもりに御座候」とあり、この時の健康状態は余りよくなかつたのである。しかし同じころ友人平賀春郊宛には、「(試験は)十七日に済む。直井を待つて二十二日あたり当地出立、途中で少し遊んで直行帰村するつもり」と書いている。また、これより一ヶ月ほど前の五月十三日、工藤という友人宛には、「山陽から九州を廻るも愉快らしく思はるる」と書いていることなどから、中国路の旅は前々から心がけていたところであり、この時体が不調であつたところから、おそらくは途中下車して無理しない軽い歩き旅ぐらいをするつもりで、岡山から足を踏み入れたところ、結果的にはこんな長旅となつてしまつたのであろう。かれを長旅に駆り立てたものは何であらうか。

まず動機の第一は、これまでの研究家がひとしく指摘するところの、有本芳水の誘いかけに因ると考えられる。芳水は花袋が「岡山県の高梁川は美しい所で、利根川の上流にも勝つた景勝だ。上流にある新見は山の中の城下町として大変気に入つた。あそこを主題にして小説を書きたい」と語つたと牧水に伝えてすすめた¹⁸ というのである。牧

若山牧水「幾山河」の歌をめぐって

水と花袋とはその性格や作風文質などの点で似たところがあり、中学時代から花袋に傾倒していたらしい。三十九年十二月二日平賀春郊宛書簡に、「延岡にゐた頃から僕は花袋の作物が好きであつたが、今考へてみても、どうしてもかれは現代日本の小説界に於けるオーソリテイであると思ふ……明治の真の小説は、漸くかれによつて起つてきたと見ても差支へはあるまい云々」と、きわめて高く評価している。その花袋の推奨する新見である。しかし、花袋は実際に新見に足を踏み入れてはいないらしいと大悟法氏は言う。もしそうであつたとしても、明治三十九年九月には、福山—府中—上下—三次—出雲大社という旅¹⁹をしてゐる。特に上下町では美知代やその両親の歓待を受けて二日も滞在している。——この旅は実は同年八月の「文章世界」にのせた短歌五首のうちの「越えて山幾重の遠にある君よさびしかるらむわれもさびしき」²⁰の一首から考えると、一時は永代との恋を知つて(その恋が既に純潔を失つてゐる)不快に思い処置に窮し、事情を両親に告げて引きとらせたとはいへ、自分も不倫臭い恋情を抱いていたこととて、同情と思慕に耐えず、美知代に会う目あての旅であつたのである。

——そんなわけで新見を見なくても上下町からの類推で新見を語りすすめるくらい知識は持つていたであらう。また、花袋は地図や地理が大好きで、三六年には博文館で山崎直方や佐藤伝蔵らの「大日本地誌」の編集に従事してゐるのである。ともあれ、その花袋の推奨する旅というところで牧水は多分に心を動かされたことであらう。

第二の動機は、この年の春ごろから牧水には園田小枝子²¹という恋人がいて、その郷里が福山市鞆町であることと関連がありはしないかということである。大悟法氏も「当時既に恋人だつた小枝子の故郷が広島県の海岸だつたということ、よそながらでも、その附近を見

ようとすれば福山に出なければならぬからである」と、二本松峠からのコースを福山経過に置いた見方を述べている。私は中国路を選んだこと自体に小枝子にかかわる何らかの気持ちをはたらいていたとは考えるが、福山に接近したとみる大悟法氏の推定には賛成できない。そこには園田直三郎という小枝子の夫やその子供たちが住んでいるのである。その人妻と恋におちた牧水にとっては遠く避けて通りたい気持ちの方がむしろ自然と考えたい。福山を避けて奥深い山中を迂回したのではないかとさえ私は考えたい。さてここで小枝子について少しふれておく。この旅立ちの直前の六月十三日平賀春郊宛の手紙に、「十九日晴れ、ばと祈つてゐる。そしたら僕は一日野を彷徨ふつもりだ。一人ではない、が、恋でもない、美人でもない、たゞ憐れな運命の裡に住んでゐるあはれな女性だと想ってくれたまへ」とあるが、この女性が小枝子であることは間違いない。牧水は人一倍同情心が篤く、この恋も女の悲しい境遇への同情から発したものであろう。それがかれの性格上短日月に激しく燃え上がったのであろう。この旅の耶馬溪にての詠に「ただ恋しうらみ怒りは影もなし暮れて旅籠の欄に倚るとき」と詠む、この相手は小夜子と考えられるが、この恋は当初からかなり波瀾含みのもので決して甘美なものではなかったようである。かれの早大同期の親友佐藤緑葉は、小枝子を評して、

私は直接には彼女に二度しか逢つてゐないし、家庭の事情とか境遇とか、乃至頭の傾向とかさうしたことは一切話し合つたことがないから何も知らぬ。たゞ私が逢つた折の外的印象だけを云へば、その人はかなり美しい人だった。背は高い方で一恐らくは牧水よりは高かったのではあるまいか―眼に悲しさうな色を湛へてゐる人だった。若々しい娘といった感じは殆んどなく、既に人生の實際上の経

験を相当に重ねてきたといへる風があった。浪漫的匂ひを見せるものは何もなく、寧ろ現実的な生活に疲れたやうな感じの見える人だった(22)

と、陰質的な印象を対面当初から感じている。果たせるかなこの恋は五年で悲恋に終わる。その頃の心境を牧水の歌に見ると、

若き日をささげ尽くして嘆きしはこのありなしの恋なりしかな

はじめより苦しきことに尽きたりし恋もいつしか終らむとする

五年にあまる我等が語らひの中の幾日を喜びとせむ 「路上」

いずれもこの恋の性格を語らないものはないが、特に最後の詠は、暗く険しい性格をよく表わしている。ともあれ牧水にとって恋人らしい恋人として、はじめて出現した女性の出身地が福山であるということとは、この中国路の旅と関係がないとはいえないであろう。この頃瀬戸内海を渡る船中で、

いと遠く君が生まれし国山ながめてわれは帆柱に倚る

「独り歌へる」

恋人の生まれしといふ安芸の国の山の夕日を見て海を過ぐ

「別離」

これは同一作の改作という関係かと思われるが、小枝子を偲んでいるところから、前述のような推論も成立する可能性は高いといえよう。第三の動機として、前述のような牧水と岡田美知代との関係を考えてみたい。これは現在のところ確証を得るまでには至っていない。しかし、次章に述べるようなかなり深い関係から、十分考えられることと確信している。牧水が通つたこの時点では、美知代は強制的に帰郷させられて閨々の日々を上下町で送っていたのである。それは「薄団」や「縁」に描かれているように、永代との恋から監督者である花

袋の愛情（多分に異性愛も含まれる）を逆なでして不興を買い、なま木を裂かれるようにして帰郷させられたのである。そこでの生活は美知代にとつては針の帯に座らされるような思いであつたであらう。花袋の「私のアンナ・マール」にも「悲しいやうな、泣きたいやうな、腹立たしいやうな手紙」が美知代から届いたとか、「備後の山中」の中にも「かの狭い一間（うす暗い二畳のへや）の中で女は恋の傷に悶えてゐるのである。かう思ふと私はたまらなく可愛想になつた」などと書いてゐる。後の章で述べるように関係の浅からぬ女が、そうした悲境にあるのを黙視しがたいヒューマンなフェミニスト牧水である。自然と足は上下町の方へ向かつたことであらう。立ち寄つたことも、ましてや会つたこともどこにも証明する材料はない。たゞいくつかの条件からの推論としてとどめておくより仕方がないのが残念である。

第四の動機は、この高梁川を遡る中国路の旅に限つたものではないが、牧水には川や溪を遡るという傾向がその旅に多く見られる。ここもその一つであるという見方である。大正七年十一月伊香保から利根川の上流吾妻溪谷に至る旅、大正九年四月長瀬附近から荒川を秩父の奥に遡る旅、同年五月の吾妻信州の旅、大正十年九月白骨温泉の旅、大正十一年十月軽井沢から草津・四万・法師・老神・白根・奥日光方面の川の上流地帯を巡つた「みなかみ紀行」の旅、大正十二年十月千曲川沿いに遡つて秩父に抜けた「木枯紀行」の旅など、いずれも上流に遡るか上流地帯を巡るかの旅である。随筆「溪をおもふ」の中で「利根川を」わづか一足でとびわたることのできる「地点にまで遡つた心境を、

神の前にひざまづくやうな、ありがたい、尊い心になる。水のまほろし、溪のおもかげ、それは実に私の心が正しくあるとき、静か

若山牧水「幾山河」の歌をめぐる

に澄んだとき、必ずのやうに心の底にあらはれて、私に孤独と寂寥のよろこびを与へて呉れる。

とあるによつて、遡つた時の心境がわかる。ほそほそと流れる水がやがて大河となり滔々と溢れるようになることを幻想したり、自然の原初や原点の姿をそこに発見し莊嚴の感にうたれたり、永劫の静寂や悠久の生命を感じて人間存在のはかなさ孤独寂寥を実感したり、ともかく神をそこに実感するのである。牧水の歌にもよく見られる。

疲れ果てし心の底に時ありてさやかに浮かぶ溪のおもかげ

「溪をおもふ」

ほととぎす聴きつつ立てば一滴のつゆより寂しわれ生きてあり

「独り歌へる」

天地のいみじきながめに逢ふ時しわが持ついのちかなしかりけり

「路上」

こうした自然観や生命観は、かれが日向の山奥の溪谷の故郷で、「天然を相手」として生い育つた幼時体験に基づくことが大きいと思われる。「思ひ出の記」の一節に、

……友だちと一緒に釣るよりもひとりぼっちで釣るのを愛した。そのため他の人の行かぬやうな場所を選んで釣りに行った。わざわざむすびをこさへてもらつて山奥の溪へ入りこむことが多かった。

とある。幼い時の習慣が生涯続くことはよくあることである。それと共に牧水の場合は独歩への傾倒ということが大きい影響をもたらしていると思う。愛読書として「万葉集」と「独歩集」とをあげてゐるところからもうなずけよう。次の手紙は下野の人石井貞子にあてたものの一節である。小枝子に失恋のころ一時この人に燃える思いを数多くの手紙で訴えてゐる中の一つである。明治四二年五月二二日のもの。

……(独歩によって宇宙自然の神秘を知ることができるようになって)唯一無上の幸福であり、感謝であるのです。これらの感じの前に富貴榮華が何でせう。恋が何でせう。独歩集だけでは不充分です。武蔵野・運命・濤声など、これらをあつめて熟読してごらん下さい。たしかに数部の教典を読んだ以上のあるものをそこに残ることを信じます。そしてこの大自然の偉大なものにおどろきたいという仲間の人になつて下さい。

とある。大自然の偉大さを認識したり感動したりするのではなくて驚嘆する、それが大自然に接する根本的姿勢だということは、独歩のしばしば力説するところであり、ここもそれをふまえた牧水の独歩礼賛の一文である。明治四一年六月二一日独歩は湘南の地茅ヶ崎の南湖院で没した、それを悼んだ牧水の歌は、

いづくよりいづくに行くやや空の白雲のごと逝きし君はも

仰ぎ見るみそらの庭の樹あめつちの冷やかなりや君はいまさず

君逝けばむらがり立ちて静けさの昼くるを知らず君追ふとおもふ

〔別離〕

四 「蒲団」の岡田美知代について

昨年の秋、私は若山旅人氏から哲西町の小坂弘氏を紹介され、予め連絡しておいて二本松峠をおとずれた。(小坂氏への手紙はなぜか住所に見当らないと返送された) そのおり、同行し親切に案内役をしてくれたのが上下町商工会の会長で本屋を業とする長秀雄氏で、氏は郷土史や文学に関心が深く、特に岡田美知代については異常なほどで、今も地元的資料の提供を絶えず受けている。そのおり東城町に江戸時代から続く古い旅館「三葉荘」を経営する保沢 洵氏(長氏の親友)を訪問

し、歓待を受けながら一夕三人で雑談した。保沢氏は五十がらみの白髪長身、人品卑しからぬ人物で、俳画や茶などを嗜んでいる。その人が談たまたま二本松峠のことにふれたおり、牧水は「蒲団」を読んで女主人公が高梁川上流の新見出身の人であることに誘発されてこの地まで帰途足をのばしたというような解釈をした。そんな発言を有本芳水も一時していたようである。しかし、牧水の旅は「蒲団」発刊に二ヶ月ほど早い時期のものである。私はそのおり自説の岡田美知代その人にひかれての旅かと思うと話した。次にその人物の概要をできるだけ簡略に紹介しよう。(長氏の調査をとり入れながら)

美知代は上下町でも有数な実業家(主として金融業)で知名士(村議・町長・県議など)である岡田胖十郎(二八五三―一九三三)を父とし、尾道の人美那(二八五九―一九三九)を母とし、その長女として明治一八年四月十日に生まれた。兄弟姉妹は美知代を含めて五人。長兄実磨は明治十一年生まれ、同志社・慶応各大学に学び、アメリカのオベリン大学を終えて帰国し神戸高商・第一高等学校各教授。英語担当。次兄束稲は明治十四年生まれ、同町岡田義照の養子となるが、比較的若くして結核で死亡。第三妹は明治二二年生まれ、高等商船を出て日本郵船外国航路の船長などをつとめ五四歳で死亡。妹万寿代は明治三十一年生まれ、庄原市の八谷正義(後述)に嫁し昭和十七年四五歳で死去。なかなか教育も高く社会的にも相当な人々が出ている。

美知代は地元の小学校を終えると、当時兄が高商の教授として神戸に居住していた関係もあって、神戸女学院に学ぶ。そこはキリスト教系の学校であるが、(母美那は同志社女学校卒)の熱心なクリスチャン)元々文学好きでその方面に熱が入らず、投稿から花袋を知りついに同校を中退して明治三七年二月十九歳のおり上京し、花袋宅や花袋の妻の

姉浅井らくの家に寄宿し、花袋から小説を学びながら津田英学塾に籍を置いたが、体も弱く余りまじめな学生ではなく卒業はしていない。同三八年八月牧師希望の同志社の学生永代静雄（二八八六一一九四四）と知り合い、永代は翌九月神学希望を捨て文学を志し同志社を中退して早稲田に転学した。二人の交際を暖かく見守っていた花袋ではあるが、そこに純潔ならぬものを認めてからは、美知代に異性愛をひそかに抱いていただけに嫉妬をいだくようになり、責任が持てないことを理由に父親に引き取りを要請し、同三九年一月父胖十郎につれられて郷里に帰り、四一年四月上京を許されるまで二年三ヶ月間、前述のように淋しく悩ましい家郷生活をする。その間花袋は美知代への同情や思慕に駆られて三九年九月訪問を兼ねた大社まいるの旅をしている。家に閉じこもってはいしたが、あいかわらずの文学熱によって花袋の編集する「文章世界」に投稿している。「キーチャン」「移動」「でこ市」「前の家」「一本榎」「いとこ」などの短編がある。（多くは選外佳作として書評だけの紹介であって入選による全文掲載にはなっていない）一方花袋はこの美知代と自分、そして永代の出現による男女の愛欲を中心としたトラブルをモデルに「蒲団」を書く。文壇への影響は大きく、自然主義の方向を決定した。拘月は「この一編は肉の人、赤裸々の人間の懺悔録」と評す。花袋研究家の岩永胖氏は「ハルトマンの『寂しき人々』の構想にその体験的事実をはめ込んだもの」⁽²⁸⁾という適評をしている。花袋はこれによって自然主義作家として不動の地位を確立したが、モデルにされた二人は、世人の好奇心のさかんにされひやかしの目で見られて、しばらくは人目をさけて地方にさすらうといった不遇に陥った。

その後の美知代は、上京後兄実磨の許に身を寄せていたが、無断で

若山牧水「幾山河」の歌をめぐる

行く方を断って永代と同棲した。探し出した花袋はこれを養女として四二年一月正式に二人を結婚させた。翌二月美知代は女兒をうむが、貧窮と性格上の対立もあって夫婦仲は悪く、育児もできない状態となる。見かねた花袋はその子を妻の兄太田玉茗の住職する羽生市^{はとう}の建福寺（田舎教師）のモデル小林秀三の下宿寺でその墓も同寺にある）に養女として預けるが三歳ごろ死亡、美知代の「里子」（四十年十月「スバル」）や花袋の「幼きもの」などにはそのいきさつが描かれている。そのころの美知代にはほかに「侮辱」（四二年一月「女子文壇」）天の部に当選、「ある女の手記」（四三年十月「スバル」）などがある。第二子は男で明治四四年三月に生まれ名は太刀雄という。入籍は二人の結婚届が大正六年三月であるため遅れてその三日後富山市ですましている。前述のような次第で東京にいられず各地を転々としていたらしい。二人の仲は次第に溝が深まり、永代の大酒飲みも原因となつてか、大正十五年七月、美知代は当時カリフォルニアで成功していたいとこ（名は福井千恵とか）を頼って禁酒国アメリカに長男太刀雄をつれて渡った。渡米費は実業之日本社で負担し、滞在費はそのいとこが負担したらしい。そこで邦字新聞社の記者、日本語の教師などをつとめているうち、佐賀県出身の花田小太郎という人（性格は温厚円満で好人物、但し職業は不詳）と結ばれた。比較的安穩な生活を送っていたらしい。しかし、長男の太刀雄は病気にかかり、単身帰国して療養していたが死亡した。永代の戸籍を見ると、昭和七年五月東京市荏原郡大森町の永代静雄の許で死亡し、大森町長宛にその死亡届も出ている。二二歳の若さである。孤独寂寥のうちに死んだらしい。晩年の美知代はこの子に深い愛情をとどめていたという。文筆活動については、渡米前の大正十二年十二月、「愛の学校叢書」という企画で東京神田の誠文堂から、

ストウ夫人原著の「アングル・トムズ・ケビン」を永代美知代訳として「奴隷トム」(六五八ページ、定価三円)という書名で出版している。大正十四年には四版を重ねている。これはこの本の翻訳の最初といわれている。かなりの売れ行きであったらしい。また、大正十三年五月には同書店の同一企画で、ミューラック夫人原著「ジョン・ハリファックス」を翻訳した「愛と真実」(六四〇ページ、定価三円)を出版している。

滞米生活十六年余、昭和十六年一月、日米開戦の風評の高まる頃、夫花田と共に帰国した。既に上下町の両親は亡く、前夫永代静雄(その後新聞人として活躍し毎夕新聞の社会部長などを経て昭和十五年退社し、退社後は伝書鳩の飼育普及につとめ、雑誌「普鳩」などを発刊していたが、昭和十九年八月、五八歳で他界)とは無縁の人であり、師の花袋(昭和五年五月、六十歳で他界)も亡く、実妹万寿代の嫁ぎ先の広島県比婆郡山内北村大字川北(現庄原市川北)の八谷正義方(やたがひ)を頼り、その別宅に入った。八谷正義は、明治二四年同所に生まれ、北大農学部を卒業し、林学博士で台北高等農林・北大農学部各教授を経て庄原市長を二期つとめ、現在も健在。ただし万寿代夫人は昭和十七年六月札幌にて四五歳で病没している。その別宅は川北小学校裏手、太神宮の神域に近く、鬱蒼たる杉の森の中に、人家からは離れて淋しいくらい閑静な所にある。(今は美知代も既に他界し、住む人もなく藪を分けてやっとなると、荒廃し傾いたあばら家が一軒、狐狸のすみか然として残っている) 夫花田は昭和三年七八歳で死亡、美知代はそれから十年後の昭和四三年一月十九日、八三歳の高齢でその生涯を閉じた。その晩年の十年間を殆んど毎日のように訪れなついていた少年がいた。その人は現在庄原市役所に勤務し、文筆にたしなみ、同人誌などで活躍している原 博巳氏

(庄原市本町一六五三)である。現地調査のおり私は大変な世話になり、その後も絶えず協力と指導を得ている。この人を通じて晩年の美知代の性格や生活ぶりを聞き得た、その大要を次に紹介しよう。

その印象は、小ざっぱりとして清潔で、気むずかしくてドライで、言葉によどみやあいまいさがなく、いつも若々しくて元気で、和服は殆んど着用せず、古風なアメリカンスタイルといった洋装で、英会話をラジオでたのしみ、吉川英治の「新平家物語」などを愛読し、原氏を相手に明治大正の文壇について語り、わけても独歩や牧水の話が多かったとのことである。(花袋と独歩とは深い関係があったので当然であるが、牧水の話が多かったということから、個人的直接の関係があったと推量される) 時にはキリスト教の話もあったと。八谷 均氏(正義の弟)の評にも、「大陸的な面もあり、この土地の常識の尺度では測り切れぬところもあった」(24)とある。とにかく才気溢れた万年文学少女型であったらしい。

五 牧水と美知代と

やあ牧水そちは日向の山なりの底なしふくべ酒じみしかな

この歌は、美知代が牧水を語るときによく聞かされたと原氏は語る。おそらくは若い早稲田の友人か、酒のみ仲間たちが、牧水の酒仙ぶりを椰楡して詠み、酒席ではいつもうたわれたものである。美知代は生米酒を好まなかったようであるが、牧水の純情・素朴・篤実な人からへの傾倒から、こんな歌をよく耳にする場に同席したのである。二人とも明治十八年生まれで、共に都から遠隔の山間の田舎に生まれ育ち、早くから文学好きで投稿誌に盛んに投稿し、旧知の間からであったと推量される。一例を「中学雑誌」にとれば、美知代は明治三六

年一月号に「小使」という短編を男名ではあるが発表し、牧水は三五年一月号から三六年十一月号にかけて、和歌や俳句を通計六回も、「牧水」その他の号で発表している。また、牧水は早大英文科、美知代は津田英学塾（これは明治三三年津田梅子の創設した英学塾で麴町一番町にあり、創設当時の塾生は十余名という。美知代が入学したのはそれから三、四年後であるからその規模は察せられよう）であるから、当然英語英文科で、専攻も同じで話もあうはず。また、その上京年次も同じく明治三七年で、美知代は二月、牧水は四月。さらには居住地についても、美知代は上京した一ヶ月ほどは小石川小日向水道町の花袋宅に居住し、あとは花袋の妻リサの姉で未亡人となっていた浅井らくの麴町区土手三番町三七（市ヶ谷駅から四谷にかけての濠の土手側の台地）に居住。牧水は上京直後から九月牛込下戸塚の清致館に北原白秋らと同宿するまでの半年ほどは麴町区三番町五七伊川方の同郷の、友人小野岩治の下宿先に同宿している。これも市ヶ谷から飯田橋にかけての濠端の土手上的の台地で美知代の下宿にほど近く、津田英学塾に通う道筋にあたるか、ほど近い所であったようである。（この小野の女性関係で知り合った府下玉川村瀬田の内田もよという女性の家で、八月十六日から約一ヶ月間、健康を害して牧水は転地している。多感多情でロマン的心情豊かな牧水のことゆえ、互いに接触し交友関係にあったことは充分考えられることである。わけでも美知代は若い男性の目につき易い風貌振舞いが多かったようであるから。伊藤整氏も、

岡田美知代は日によつて美しく見える時もあれば醜く見える時もあったが、その目には光があつて表情の動く女であつた。その性格が派手で、家が裕福だったので、金の指輪をはめたり、流行りの帯をしめたり、当世風の身づくろひをしてゐたため、道行く人の目を

若山牧水「幾山河」の歌をめぐって

惹いた⁽²⁵⁾

と述べている。次に牧水の友人たちと美知代との関係について見てみよう。

早大の学生松本春潮（修二）は美知代とは投書仲間時代からの知り合いで、その松本が時と所とを指定してデートを申し込むことがあったが、美知代はその優柔不断ぶりに愛想づかししてあっさり袖にする、松本は間もなくその失恋も原因して中退し郷里の鳥取県西伯郡に帰ってしまった、ということが和田芳衛氏の「蒲団の芳子」⁽²⁶⁾の中に見える。牧水の明治三七年四月十一日の日記に「入学の手続きをとりて大学高等予科の事務所に行き、其後の手続きを聞いて、大学の寄宿舎に松本春潮君を訪ひしに、折あしく先月来病氣にて帰国せられたり」とあり、また翌三八年には牧水・白秋・春潮らが「千鳥会」という文芸サークルを結成しているところから、牧水と春潮とは浅からぬ仲である。そこから牧水と美知代との間にも接触があつたであろうと推量される。また、和田氏の同書には、「若山牧水や安成二郎などと武蔵野の日野あたりを散歩したのも、すべて無邪気な行爲だった」と、美知代の口から聞いたところを叙している。また、「永代静雄が離別のかたちで失踪したとき、美知代はこのまま待つかどうかを田山花袋と安成二郎の二人に相談しました。安成二郎は『彼はきっと帰ってくるよ』と言つたのですが、花袋は強引に即時解散説を美知代に押しつけ云々」ともある。これから安成二郎は美知代からかなり深く信頼を受けた男友達であつたようである。安成二郎は秋田県出身で大館中学を中退し文学志望で上京していた。その一歳上の兄が安成真雄で、牧水とは早大英文科の同期生で、文学愛好の念強く、土岐善麿・仲田勝之助・佐藤緑葉・藤田進一郎・三沢 豊ら五人を加えた七人で明治三九

年「北斗会」を結成している。また、牧水が一時新聞社に就職するが、その時の有力な手づるとなるのもこの安成二郎である。そんなわけで安成兄弟と美知代との関係を通して牧水と美知代とが無関係でありえた筈がない。また、一緒に武蔵野の日野あたりまで散歩したとあるが、二人の同行を証するものは現在のところ何もないが、多分その記述どおりであったと思われる。日野市の百草園もぐさ（当時百草山という）は、「武蔵野の平原は地平に続くまで眼下に展開する、」すばらしい眺望をもち、「東京に近い割合に一体の空気が深山」⁽²⁾といった景勝の地で、当時の早稲田の学生たちからは好まれ、牧水も単独、または土岐善麿らの友人としばしば出かけて、石坂という人の経営する茶店を定宿としていた。その「ヤマちゃん」という少女を牧水は格別にかわいがり、

柿落葉桜落葉の中に住む山家の子なり瞳の涼しさ 「新声」

と詠んでいる。また恋人園田小枝子を伴って旅宿しては、

つみては捨てつみては捨てし野の花のわれらが後に遠く続きぬ

など数々の歌を「独り歌へる」の中にとどめている。またその女性と失恋してはひとり出かけて泊まって、

あをばといふ山の鳥啼くはじめなく終りを知らぬさびしき音なり

などと暗い失意の境をやはり同集にとどめている。喜びにつけ悲しみにつけ、牧水にとっては深いかかわりがあった所である。牧水は総じて武蔵野をこよなく愛し、「私の姉なる武蔵野」⁽²⁸⁾とまで形容している。傷つき易いかれの心に慰めと励ましとを与えてくれたのである。日記その他でも美知代を伴ったことは記されていない。当時とやかくの風評があったその名を記すのを憚ったのかも知れない。

また、牧水は啄木が「若山君はだれにも愛される目をしてゐる」

（明治四四年五月一日の日記）と記するように、多くの友人から敬愛されていたらしい。またその情味哀愁ゆたかでロマン的情調をもち、朗々たる声調の歌への魅力もあって、若い女性たちからも親愛と慕情とを寄せられていたようである。また牧水側からも人一倍のさびしがりやから慕い寄って、その女性関係は清純かつ多彩であったようである。明治四十年二月の「新声」にも、

わが胸によき人住めり名も知らず面おもも知らずただに恋しき

女三人かたみにおのが恋人を思へど言はぬ春の灯あかりのかげ

あひも見で身におほえぬしさびしさと相見て後のこの寂しさとなどとなまめかしくいわくありげな歌をとどめている。以上のことから牧水と美知代との間は、文学を材とし友人をも交え、若い男女として多分に共通接点のある友人関係が成立していたものといえよう。「すべて無邪気な行爲だった」と美知代が述懐している、その言葉どおりの関係であったであろう。

次に牧水と永代静雄との関係を考えてみよう。それに先だち永代の人物について概要を紹介しよう。永代は明治十九年兵庫県美囊郡北谷村ノ内富岡村（今の吉川町）に長谷川 順（神戸湊川小学校長）・妻さやの三男として生まれ、幼にして父に死別し、同村東林寺住職永代義範の養子となるが、まもなくその養父にも死なれ、十六歳で神戸に出て神戸教会の理事村松吉太郎の援助で関西学院、同志社神学部などに学んだ。岡田美知代を知ったのは明治三八年八月の摩耶山のキリスト教大会のおりという。共に琵琶湖畔・石山寺などに遊び、将来をちぎる約束を交わした。同年九月、同志社を中退し文学志望に転じ、美知代のあとを追って上京し早稲田に入った。（岩永胖氏によると、高等予科に半年ほど籍をおいただけという）文学についてはこれまでに「万朝報」

や「文芸倶楽部」などに投稿し入選したこともあったという。「蒲団」のモデルにされてからは、「君は蒲団のモデルだそうだね」と好奇と冷笑で軽くあしらわれ、なかなか就職口が決まらず、地方めぐりなどしては夫婦で童話などを書き、糊口を凌ぐこともあったらしい。東京毎夕新聞にきまってからはアメリカ式のジャーナリズムを大胆に紙面に取り入れ、新聞人としては前述のようにかなり成功をおさめたらしい。

その性格や風貌については、後年美知代が花袋やその著「蒲団」について抗弁して書いたもの(29)の中に、

私の彼氏は肥った色白の反対でやせぎすで、むしろ小麦色の、中背どころか背低の小男……

と述べ、また東京を食いつめて別府に下ってきた永代夫妻と明治四四年ごろ会ったという田中 純氏(当時関西学院の学生)は、

「蒲団」では)妙にヤソくさい、気どりのオッチョコチョイになっているが、初めて見る彼はもっとあけすけな色白い男で……『はっはっ、モデルを見物にきましたね』と大きい声で笑ったが、この声も顔にもまるでこだわりがなかった(30)

と書いている。総合してみると、色の黒い小男で、性格は明るく大胆で、あまりくよくよしない淡泊なところがあり、しかし花袋に対しては激しい怒りを抱き「あれは実に悪辣な狸おやぢ」と決めつけている、かなり神経質で昂進型であったらしい。花袋の「縁」では「蒲団」の続きを描いているが、そこでは妻や子を見捨てて大酒を飲み乱暴をしたりして、美知代も一旦は別居や離婚を決意する。それは和田氏の書くところでは、「花袋先生の方ばかり向いている美知代という妻に腹を立てた結果のやけ酒と見られなくはありません」とある。のち正式に

若山牧水「幾山河」の歌をめぐる

離婚するところから見ても、どちらにも性格の激しさがあったらしい。

さて、牧水との出会いについては、おそらくは明治三八年九月、永代が上京して、牧水が当初下宿したと同じ麴町区三番町内に止宿し早稲田に籍をおいたあたりからであろう。共に貧しい苦学生であり、似たような体軀風貌であり、情熱に傾斜した性格にも共通点があり、何よりも恋愛上の苦悩体験では共通性があり、しかも共に酒好きであり、美知代の友人ということと急速に親交の度を深めたと思われる。しかしそれを立証する記録は数少ない。その一、二をあげよう。明治四一年七月、早大英文科を卒業した牧水は、佐藤緑葉と共に「新文学」という文芸総合雑誌を企画し、着々その実現に努力していたが、メドのついていない資金ぐりに失敗しついにその企画を放棄することになるが、その創刊号の執筆予定者の小説の部のリストに、「柳橋の火事・永代静雄」とあり、また、明治四三年三月、牧水は「創作」を発行するがその創刊号に「断崖の獣(散文詩)・永代静雄」とあることなどから、文芸活動上の親交と信頼の度合いが察せられよう。また、牧水は明治四二年七月から十二月までの半年間、中央新聞社社会部に勤務するが、その頃のくらしぶりを「貧乏首尾なし」という文章の中で、

学校を出ると程なく京橋区のある新聞社に勤めた。月給は二五円であった。社会で止むなく大嫌いの洋服を月賦で作ったが、ネクタイを買ふ錢がなく、それを抜きで着て出て来たところ、——さうだ、靴をば永代静雄君のを借りて穿いたのだった。——社の古老田村江東氏が見兼ねて自分のお古を持って来て結んで呉れた。

とあり、永代との関係が単に文芸上の交わりだけでなく、その靴を借用するというのであるから、身内や兄弟に近いほど遠慮無用の親近関係にあったことが、この一事をもって察せられよう。

総合してみると、牧水―美知代、牧水―永代という二筋の人間関係は、相互に共通し重なる領域が多く、互いの立場の理解に立ち、気心の知れた、ごく自然で無理のない友人関係であったと察せられる。そこには愛とか情とかいったわずらわしいねばねばしたもの全く無いところの。であるから、永代は花袋をひどく憎み恨んでも、牧水は前述のように尊敬し高く評価することができたのであろう。つまり、私情を挟まない間がら、それだけに思いやりや理解は深くかつ純なものがあつたであらう。原氏の語る晩年の美知代についても一度耳を傾けよう。

岡田先生は師である田山花袋のことを当然のことながら決して花袋と呼び捨てにされることはなかつた。必ず「私の先生」であり、それは恰も神様の次に尊敬する存在であるかのようなうだった。一番楽しそうに話されるのは、牧水を語られる時だった。岡田先生は牧水のエピソードを幾つか話して下さつた。わたしはそれから牧水が好きになった。ユニークで広い大きな牧水の人間性が彷彿と浮きあがってくるからである(31)

と書く。美知代の八十余年の生涯は、自ら種を蒔いたことによるものが多分にあるにしても、波瀾と起伏と愛憎と流転とに満ちたものであつた。その嵐の吹き過ぎたあとの静かで澄んだ晩年の心境に、鮮明に残つたものが、「私の先生」としての花袋のイメージと、ユニークで豊かな牧水の人がらであつた。純粹なるものは時の流れを越えて永遠に輝くものである。美知代の純粹一筋に生きたその心境には、ロマンと清純に生きた牧水の面影は、理想的男性の思慕像として残つたのであろう。牧水もその美知代に無反応であつた筈がない。中国山地の山間の田舎町に、愛する男性との仲を裂かれ、淋しく孤独な憂悶の日々

を送る美知代に思いを馳せ、自然とその足は二本松峠へと向き、二本松からの道は自然と上下町經由のコースをたどつたことと私は思う。いや思はずにはいられない。噂にでもその人のことを聞き、かげながらその幸福を祈りながら旅をつづけたことであらう。推論に終止した論文ではあるが、推論の根拠になる傍証がためだけは出来たかと思ふ。決定づける根拠を求めて、私の牧水研究の旅は今後もつづくことになろう。文献の上で参考にさせていただいた、大悟法利雄氏・小林一郎氏・岩永 胖氏・森脇一夫氏ら、並びに、現地で便宜をいただきお世話になつた、庄原市の原 博巳氏、上下町の長 秀雄氏・宮田佳明氏・館林市の長谷川吉弘氏ら、多くの方々から感謝の意を表してこの稿を終わる。

注ならびに参考文献

- (1) 大悟法利雄氏には、「若山牧水伝」(短歌新聞社)、「幾山河越え去り行ば―若山牧水の人と歌」(弥生書房)など、森脇一夫氏には、「若山牧水研究―別離研究編」(桜楓社)などがある。
- (2) 若山牧水・北原射水(白秋)・中林蘇水の三人をいう。多分に自称的要素も濃い。
- (3) 明治四三年創刊に成る「創作」はこの大正十四年三月は創刊十五周年に当たり、その記念として社友名簿を作り、アンケートを募集した。牧水はその生涯に約七千の歌を詠み、それが十五の歌集となつて発刊されている。その歌集名だけを列挙する。「海の声・独り歌へる・別離・路上・死か生か・水上・秋風の歌・砂丘・朝の歌・白梅集・溪谷集・さびしき樹木・くろ土・山桜の歌・黒松」がそれである。以下歌集名には注は省く。
- (5) 明治四一年六月二三日、国木田独歩は三八歳で茅ヶ崎の南湖院に病没するが、その死の床でつねに口ぐせのように語っていたことは。
- (6) 大正十年七月号「アルス」発表の「静かなる旅を行きつつ」の一節。
- (7) 石井みさき著「父若山牧水」(五月書房)の一節。

(8) 牧水はこの「山のあなた」の詩を常に愛誦していたという。明治四二年九月一日、小諸から佐藤緑葉宛書簡にも、「山のあなたの空遠く……矢張りわれらはお墓に入るまで、この詩の愛誦家であらねばならぬかも知れない」とある。

(9) ボードレールの「旅」とは、「行かんがために行くものこそ／まことの旅人なれ／心は気球の如く軽く／身は悪運の手より逃れ得ず／何の故とも知らずして／ただ行かんかな行かんかな」の詩である。

(10) 「新声」は明治十九年七月から三六年八月の間に九一冊発行になった文芸雑誌で新声社発行。牧水の歌の見えるのは明治三五年六月から同四一年十二月までの七年間で、その歌数は七〇九首という。(森脇一夫氏)

(11) 前述の十五歌集のうち第三番目の歌集で刊行は明治四三年四月。第一歌集「海の声」、第二歌集「独り歌へる」所収の歌に一三三首を新たに加えた一〇〇四首から成り、牧水の名声を一挙に高からしめた歌集として著名なもの。

(12) 正富汪洋氏への牧水のハガキに「岡山市停車場前はつねニテ牧水生」とあり、郵便局の消印にも「岡山 40.6.29」と明瞭に読み取れることによる。

(13) 熊谷屋とは旅籠兼日用品販売を業とし、昭和四年までこの地にあった店で、当主足立満氏は八代目という。大正九年峠ごえ新道がこの旧道の南側にできてさびれてしまい、昭和四年新道に面した所に移転したという。

(14) 昭和三七年二月十日NHK岡山放送局から、有本芳水(岡山商科短大講師。かつては柴舟門下で牧水・夕暮・汪洋・露風など車前草社仲間として活躍し、牧水と親交のあった人)が「私の青年時代」と題する放送を行った。要点は「けふもまた心の鉦をうち鳴らしうち鳴らしつつあくがれてゆく」と「幾山河……」の二首の歌をハガキに認め、「国境の峠の茶屋にて」と記してあった云々と。それを聞いた井伏鱒二氏が「小説新潮」に「取材旅行 吉備の旅」として載せ、それを読んだ本田実氏(倉敷天文台長。本田慧星の発見者)が、異常な熱意をもって実地踏査して出した結論で、現在はこの説が通説となっている。異説を聞いていない。

(15) 注1に示す森脇氏の著書の一節。

若山牧水「幾山河」の歌をめぐる

(16) 石見銀山とは、島根県大田市大森町にあった銀山で、最盛期は十六、十七世紀ごろで、秋田・佐渡などと著名で、最盛期の延宝五年には銀三九八貫を産したという。幕府はこの地を直轄地とし大森代官を置いて支配した。またここから産出する砒石で製した殺鼠剤をも「石見銀山」という。

(17) 牧水は若葉の頃になると、よく持病の脚気や頭痛に悩まされ、時々は胃病・神経病などを併発し、決して健康体ではなかった。

(18) 昭和四十年八月「竜」の塩田啓二氏、昭和三十七年十月「水鏡」の有本芳水氏らの所説による。

(19) 花袋はこの様子を「備後の山中」で詳しく書き、また「東京の三十年」の中の「私のアンナ・マール」でもふれている。

(20) 「越えて山……」の歌は牧水の「幾山河」の歌と発想や表現がよく似ている。牧水も「文章世界」は当然読んでいるはず、両歌の間に何らかの関係があったのかも知れない。ここは軽い推量にとどめておく。

(21) 園田小枝子は明治十七年九月十七日広島県に生まれ、園田直三郎に嫁し二人の女兒をうむ。上京し牧水と恋におちるが、のち従弟赤坂庸三の妻となり、数人の子をうみ、昭和四七年三月八日、東京品川の家で死去。八八歳。墓は大田区海岸寺にある。牧水との恋は、牧水の人生や芸術に深甚なる影響をおよぼしたといわれる。

(22) 佐藤緑葉(利吉)著「若山牧水」(角川文庫)による。

(23) 岩永胖著「田山花袋研究」(桜楓社)の一節。

(24) 小林一郎著「田山花袋研究」(博文館時代)一(桜楓社)による。

(25) 伊藤 整著「日本文壇史」による。

(26) このルポは昭和三二年十二月号「婦人朝日」に「名作のモデルをたずねて」の第十回目のものとして発表されたもの。カメラマンは大竹新助氏。

(27) 友人某宛書簡の一部。

(28) これも郷里の友人にあてた明治三九年一月十日の書簡の一部。三色刷りの絵ハガキの中の一旬で、歌としては「雲多き冬の武蔵の榛原にやぶうぐいすと春待ちにけり」とあり、武蔵野を熱愛したさまがしのばれる。

(29) 昭和三三年七月「婦人朝日」に発表になった「花袋の蒲団と私」と題して書いた永代美知代のもの。永代の描き方を不当としてかなり厳し

若山牧水「幾山河」の歌をめぐって

- (30) い口調で花袋を批判している。
田中 純著「文壇恋愛史」(新潮社)の中の一節。
(31) 厚 博巳氏らによる同人誌「遠景」(No. 3, 1980-1)中の原氏執筆
「忘れ得ぬ人」による。

A Study of a Poem "Ikuyamakawa"
by Bokuswi Wakayama

Shigeru ISHII